

母豚の最も危険な時を確認せよ

～日本のベンチマーキング:大学の研究者とのコラボレーション～

明治大学の瀨瀬先生らは「ピッグチャンプ」ユーザーのベンチマーキングの結果を毎年報告されています。これらのデータによって自らの位置を知り、日頃の管理や経営に活かすことが最大の目的です。これは「ピッグチャンプ」という世界標準の生産管理プログラムをいつも利用されている農場間で、データ提出と引き換えに入手にすることが出来るソフト情報です。以前から「ピッグチャンプ」の普及やサポートに努めている弊社が、瀨瀬先生の協力を得て実現しているもので、すべての生産者の情報が瀨瀬先生を窓口で共有されています。毎年秋に学生さんや弊社スタッフの間で勉強会も開かれています。

このほど昨年度のデータを活用したベンチマーキング資料がまとめられました。この中で、欧米で近年大変問題になっている母豚の死亡率の上昇にも触れられています。日本での状況はどうでしょうか。

【候補豚導入後、交配前の死亡】

導入後の更新豚は、自家育成、外部導入と様々ですので、(死亡の最も多い)導入後4週目がどの時点なのか、すなわち馴致育成終了後の4週目なのか、肥育豚から隔離育成舎に移動後の4週目なのか分かりませんが、死亡は導入後2～3ヶ月以内に発生が集中しています。これは肥育と繁殖のちょうど中間に位置する更新豚が、例えば繁殖豚群に存在する疾病にさらされて急性慢性疾病を発症して死亡することを考えれば至極納得がいくことかもしれません。この時期の豚は、非常にデリケートで、より慎重な管理が必要なことを裏付けていると思います。

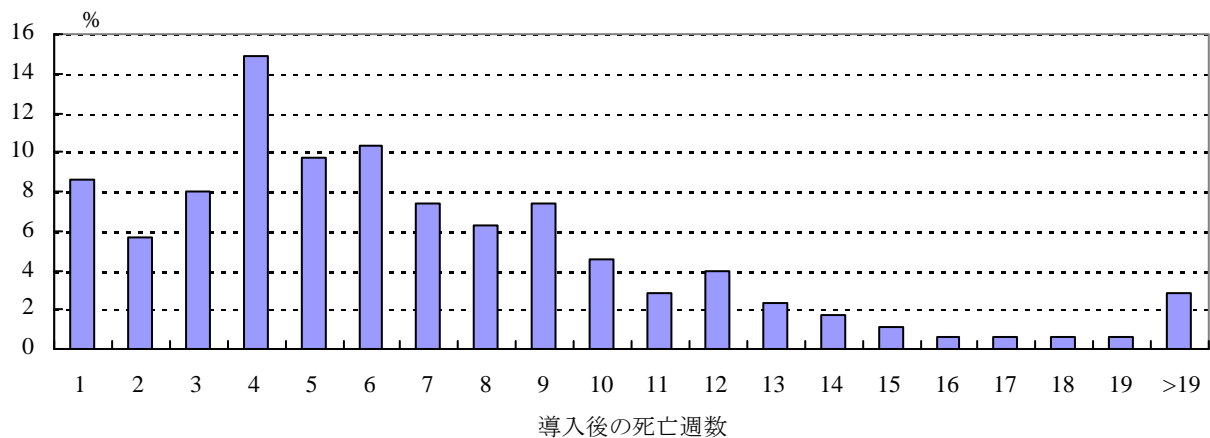


図 1. 導入後、交配前に死亡した若雌豚 175 頭の各週における死亡雌豚の分布割合

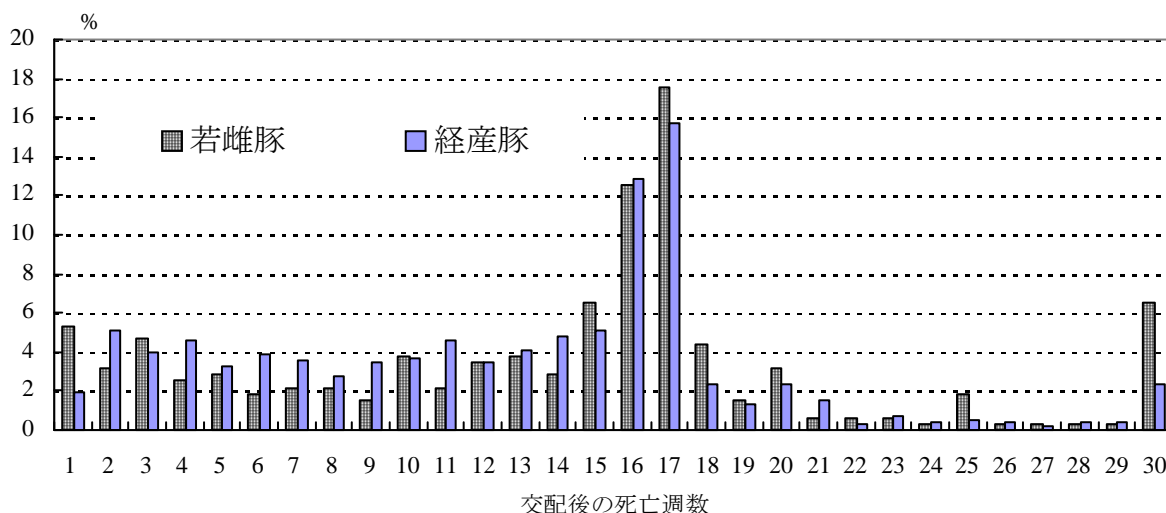


図 2. 交配後、死亡した若雌豚 319 頭と経産豚 1,218 頭における交配後の死亡週数の分布割合

【更新豚、経産豚の交配後の死亡】

それでは交配後の死亡率はいかがでしょう。

母豚の死亡率は先に示した新規の常在疾病にさらされることを除けば、一番多いのは分娩、次に交配（発情）時です。分娩が最も大変な時期というのは良く知られたことで後述しますが、交配後の死亡数を見てみると図2のようになります。交配後の死亡がピークになっているのは16～17週になっており、分娩直前ないしは分娩時を示します。若雌豚（初産を迎える豚）の方が体が出来ていない事もあり経産よりも若干負担になってようですが、いずれにしても分娩は相当な試練であることは間違いないでしょう。



母豚が頼りの健康な子豚

また若令豚では交配後1週以内の死亡が目立ちます。これは交配というイベントが若い豚にとっては大変なストレスの時期であることをうかがわせます。同時に経産豚では、分娩舎での出来事が試練であればあるほど、交配後に何かしら命を代償にしなければならないようなことが慢性的に起こっていることを示唆しています（交配後2～11週までで経産豚の死亡が若干目立つ）。

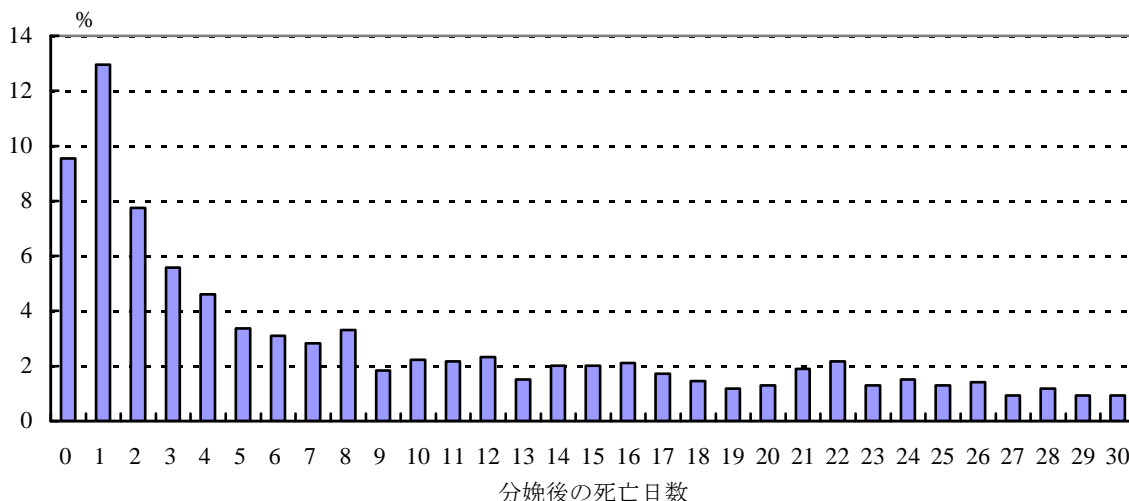


図 3. 分娩後、交配前に死亡した経産豚 1,845 頭の分娩後の死亡日の分布割合

【分娩が直接の死亡原因になる】

分娩がどれ程ストレスであり、母豚にとって大変危険な時期であるかを示すデータとして図3をご覧ください。数字は分娩後次回交配までの間に死亡した頭数の割合です。分娩日というよりも次の日がピークになっているのも特徴と言えるでしょう。母豚はとにかく頑張ったのだと思います。ポイントは死亡というイベントが母豚の不調を示す最悪の結果として表現されていることであり、母豚が分娩後の肥立ち(ひだち)を経て順調に食い込む7日目～8日目くらいまでを目処に死亡はぐっと少なくなります。例えば分娩時に難産や体調不良が発生すれば、急性の子宮炎や内膜炎などの発生を経て敗血症で死亡することが考えられます。分娩時の観察を強化し、食い込みが健康のバロメータであるとして丁寧な管理が必要だということを示しています。

【まとめ】

これらのデータはたくさんの農場の日々の蓄積によるものですが、かつ正確なデータだからこそ、日々の管理に活かせると思います。グラフはすべて明治大学瀨瀬先生によって作成されたものです。深謝いたします。

多くの生産者の方の間ではすでに認識されている分娩舎の管理の重要性を別の角度から説明してみました。分娩という大変過酷なイベント(出来事)を、管理者として農場として適切に応援していくことが、その後につながる安定した成績の布石になると思います。

2008年9月 グローバルピッグファーム(株)